

委託事業実施内容報告書

平成23年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【日本語指導者養成】

受託団体名 公益財団福島県国際交流協会

1. 事業の趣旨・目的

福島県の外国人登録数は平成22年末現在約1万1千人であり、その在留資格や日本語教室の実態から、在住外国人の定住が進んでいると考えられる。

このような外国出身県民の定住が進む中、これまで支援の対象者であった外国出身県民が、地域社会に貢献する活動の一つとして、同じ母語を持つ在住外国人に日本語指導する活動が考えられるが、この活動は自らの母語や日本語学習経験が生かせることはもちろん、日本語が全く分からない来日間もない在住外国人にとっても、母語を介しての日本語指導は、即効的な学習効果があり、さらには同国出身者ということで精神的な大きなサポートになることはまちがいない。地域の多文化の共生社会を推進するにあたっては、このように先輩格の外国出身県民が後輩格の外国出身県民のサポートに関わることは、大きな原動力となるにちがいない。

しかしながら、日本語を使った直接法の日本語教授法は、県内各地で様々なテーマで行われてきているが、母語(外国語)を活用した日本語教授法の講座は、まだ県内では実施されていないのが現状である。

については、外国にルーツを持つ子どもや、企業の研修生・実習生などの在住外国人に対し、母語(外国語)を活用した日本語指導ができる人材を育成する。

2. 運営委員会の開催について

【概要】

開催日時	開催場所	出席者	議題	会議の概要
7月2日	福島県国際交流協会研修室	市瀬智紀 中川祐治 田所希衣子 佐々木千賀子 馬嘉利 後藤キャサリン	5回の講座構成について	(1)事業趣旨の説明 (2)講座の構成と講師 (3)今後の運営委員会の日程
10月19日	同上	同上	第1回第2回の	(1)第1回第2回の講座の

日			講座の振り返りと今後の講座について	振り返り (2)今後の講座で配慮すべき点について (3)最終回のアンケートの内容について
12月20日	同上	同上	講座全体の総括と第4回運営委員会について	(1)講座全体の振り返り (2)全体アンケート結果と今後の課題について (3)第4回運営委員会の開催について
1月27日	同上	同上	講座のフォローアップについて	(1)講座のフォローアップについて



3. 養成講座の内容について

- (1) 講座名
母語(外国語)を活用した効果的な日本語の教え方講座
- (2) 開催場所
福島県国際交流協会 研修室
- (3) 学習目標
外国にルーツを持つ子どもや、企業の研修生・実習生などの在住外国人に対し、母語(外国語)を活用した日本語指導ができる人材を育成する。
- (4) 使用した教材・リソース

講師が準備したオリジナル教材

(5) 受講者の募集方法

(1) 県内の日本語教室、市町村国際交流協会、及びふくしま多文化共生サポーターへのチラシの送付

(2) 当協会 HP、県内日本語教室メーリングリスト、当協会メールマガジンにて情報の発信

(6) 受講者の総数 26人

(出身・国籍別内訳 韓国2人、中国11人、ブラジル1人、フィリピン5人、日本7人)

(7) 開催時間数(回数)25時間 (全5回)

(8) 参加対象者の要件

○外国出身の方は、日本語で行う講義が理解できる程度の日本語能力を有すること

○日本人の方は、実用会話ができる程度の外国語の能力を有すること

※原則として、5回とも受講できる方

(9) 講座内容

回	開催日時	時間数	受講者数	講座名／学習内容	講師
①	9月17日(土) 10時～16時	5時間	21人	○オリエンテーション 「どんなふうに日本語(外国語)を覚えたか思い出してみよう！」(言語習得のプロセスと誤用、直接法・間接法のメリットとデメリット、母語と日本語の違い等)	市瀬智紀 宮城教育大学附属国際理解教育研究センター教授
②	10月15日(土) 10時～16時	5時間	23人	「日本語ってどんな言語なの？」 (日本語の特徴(概論)、日本語の音声、日本人の言語行動等)	中川祐治 福島大学人間発達学類准教授
③	10月29日(土) 10時～16時	5時間	19人	「どうする？外国出身の子どもをサポート」 (外国出身の子どもに対するサポートの方法、留意点、日本の学校について等)	田所希衣子 外国人の子ども・サポートの会代表
④	11月19日	5時間	22人	「母語(外国語)を使った	中川祐治福島大学人

	(土) 10時～16時			日本語指導って、何を使って、どうやって教えるの？」 (日本語の教え方、シラバス・カリキュラムの作り方、日本語教材の使い方等)	間発達学類准教授
⑤	12月17日 (土) 10時～16時	5時間	20人	「さあ、教えてみよう！～ 模擬授業に挑戦」 (実習(模擬授業)) ○修了式	市瀬智紀 宮城教育大学附属国際理解教育研究センター教授

(10) 講座の評価

①受講生に対するアンケート(21枚回収)

■全体的にみて今回の5回シリーズの講座はどうでしたか？

項目	人数	理由
とてもよかった	18	(選択肢から2つまで選択) 専門的な知識を学ぶことができた(12) 講師の話聞くだけでなく、実際に活動することがわかった(9) いろいろな視点から広く日本語を学ぶことができた(9) 学びたいと思っていたことを学べた(7)
まあまあよかった	3	(選択肢から2つまで選択) いろいろな視点から広く日本語を学ぶことができた(3) 専門的な知識を学ぶことができた(1)
あまりよくなかった	0	
よくなかった	0	
わからない	0	

■これから、実際に母語(外国語)を使って日本語を教えてみたいですか？

項目	人数	理由
はい	19	(選択肢から1つ選択) 日本語を教えることが具体的にイメージできたから(9) 日本語を教えることの楽しさを知ったから(8)

		その他 (2) 今まで習ったことを活かしたいので、役に立ったらいいと思う。教えることは教わることにもなるので、自分の勉強になる
いいえ	1	自分の日本語力では教えることがむずかしいと思った。
わからない	2	まだ日本語が上手ではない。教えることは大変難しいと思った。

■ これからも日本語の教え方を勉強したいと思いましたか？

項目	人数	理由
はい	19	日本語の構造／専門的知識について／歴史・地理／文法／実践の実習／きちんとした日本語の使い方／教え方のテクニック／教案添削・模擬授業や実際の授業のフィードバック／何でもいいので、勉強になること
いいえ	1	実践が伴っていない
わからない	0	

■ この講座で学んだことを今後どのように活かしていきたいですか？（自由記述）

- ・ 時間が合わず全講座に参加できなく残念だった。自分の小さな力でも、何かの力になればいいと思う。また、中国語などを学びたいと思った。
- ・ 自分の活動の場で活かしたい。
- ・ 地域で活かしたい。
- ・ 日本に来たばかりの人に日本語の支援をしたい。
- ・ 日本国内や海外で教えたい。
- ・ 機会があれば、日本語支援をしたい。

② 実施主体からの研修内容結果評価

1) 受講への高い関心

広報して間もなく定員に達した。日本語を母語としない申込者を優先し、日本語を母語とする申込者数名については会場の関係上断った経緯があるぐらい好評だった。

2) 高い出席率

高い出席率を維持することができた。受講生の実態やニーズに合っていたことはもちろんだが、通常こういった事業では外国出身者が、日本人の中で少数派であることが多い中、今回の講座では多数派であり同じような環境の人たちの中で他の人

に遠慮することなくのびのびと学べる場があった。さらに講座補助者が理解しにくい部分はその都度サポートしてくれたということもあり、安心して学べる場であったことが高い出席率につながったと考えられる。

○全講座出席者 12名

○毎回の出席率 第1回(81%)、第2回(88%)、第3回(73%)、第4回(85%)、第5回(77%)

3) 高い受講生の満足度

下記の3つのアンケート項目について、9割の受講生が最高の評価をした。

■全体的にみて今回の5回シリーズの講座はどうでしたか？

21人中19人が「とてもよかった」

■これから、実際に母語(外国語)を使って日本語を教えてみたいですか？

21人中19人が「はい」

■これからも日本語の教え方を勉強したいと思いましたか？

21人中19人が「はい」

4) 参加者の実態に応じた目標の変更

当初の目的は、ある程度専門職として将来的に収入を得ることのできる教師育成ということだったが、外国出身の受講生の中には、日本語での講座自体を理解することが難しかった人もいた。英語・漢語圏の受講者には、英語で説明したり、漢字をみて理解できる場所もあったが、特にそれ以外の韓国語圏などの受講者には理解しにくかった。それを補う意味でも毎回の講座補助者の存在は大きかったと思われる。

このように、受講者の実態が把握できたため、当初の目的の教師養成から、今後日本語教師として活動するために日本語を勉強したいという自己成長につながる気持ちを興させることに変更した。

5) 参加者の地域参加の意識の高揚

最後の講座では、地域で母語ができるという強みを生かす道は、日本語教師だけでなく通訳ガイドや学校の非常勤、母語教室開催などいくつか提示したことで、今後の活動の幅を広げることに繋げる一助とすることができた。この講座は外国出身者の地域での活動の道を拓くというきっかけとして大きな意義があった。

③ 実施主体からの外国人支援体制等今後の計画

1) 地域の日本語教室での活動の場の紹介

今後実践の場のない受講生に対しては、居住地の近くにある日本語教室を紹介し、学んだことを活動につなげていく。

2) 市町村教育委員会や研修生受け入れ企業への紹介

各学校に来日した外国出身児童生徒のサポートや、企業から研修生の日本語指導の

講師紹介などの依頼があった際に、積極的に受講生を紹介していく。

3) フォローアップ研修会の実施(予定)

受講生がある程度実践を積み上げた来年度の7月頃に、実践しての疑問点などに応じたり、実践についての意見交換をする場としての研修会を開催する。

4) 外国出身コミュニティサポート研修会(仮称)の実施(予定)

今回の外国出身受講生を中心に、外国出身者のキーパーソンの存在の方々を対象とした、組織マネジメントや国際理解講座の進め方、母語支援のポイントなど、外国出身県民が地域で母語・母文化を活かして活動できるための研修会を実施する。

(11) 事業の成果

① 他事業との連携

1) 子どもサポート事業

受講生の2名が本宮市と二本松市の教育委員会から子どもサポート事業の依頼を受け、サポーターとして活動し、より充実したサポート活動を行うことができた。

2) 他団体主催事業でのパネラー参加

今回の受講を機に、受講生の1人が市内の日本語教室の方と知り合いになり、2月4日に福島市で開催された「移動する子どもたちの心のケアを考えるシンポジウム」のパネラーとして出席した。

3) 地域の日本語教室での活動

受講生のうち、日本語教室等日本語を教える場のない10名に対し、居住地近くの日本語教室を紹介したところ、5名が活動を開始した。

② 研修後の人材活用

1) 子どもサポート事業のサポーターとしての活用

県内の市町村教育委員会等から依頼があった際に紹介する。

2) 研修生受け入れ企業等での日本語講師としての活用

県内各地の企業等から依頼があった際に紹介する。

3) 学校や公民館等での国際理解講座の講師としての活用

学校や公民館等の国際理解講座で、母国を紹介する講師としての活用する。

(12) 今後の課題

1) ニーズの把握

震災後、福島県からの人口流出が続いており、しかも県内の外国人登録数が約0.5%という状況の中、来年度同様の事業をした場合、定員の20名が集まるか、ニーズ把握を十分に行うことが必要である。

2) 受講生の人材活用

今回の講座は、すでに活動している人の研修の場というよりも、これを機に活動の場が広がることを想定していた。今後は、当講座が既存の活動の研修の場としての事業となるよう、関係団体と連携しながら活動の場を事前にある程度確保した上で研修会の実施することが大切であろう。

3) 受講生の活動の場の拡大

今回の受講生が様々な場面で活動できるよう、様々な機会を捉えて人材の広報と活動のコーディネートに努めていきたい。